# 少女極刑

## セーラー服よ永遠に

### 一日目

薄暗いレンガ造りの部屋だ。
かなり広い。壁にスチールのベッドと簡単なテーブルと椅子。反対側にの壁には大き目のバスとトイレが設置され、本格的な暖炉に薪が燃え盛っている。
奇妙なのは、ほぼ真ん中に、そう、分娩台のような黒い革張りのベッドがおかれていることだ。それに天井から吊り下げられる形で鉄棒が二本横に伸びている。
その鉄棒には滑車がついている。
壁の上方には明りとりの窓があるが幅は狭い。半地下の構造だろうか。
その窓から薄く光が差し込み石畳の床に届く。

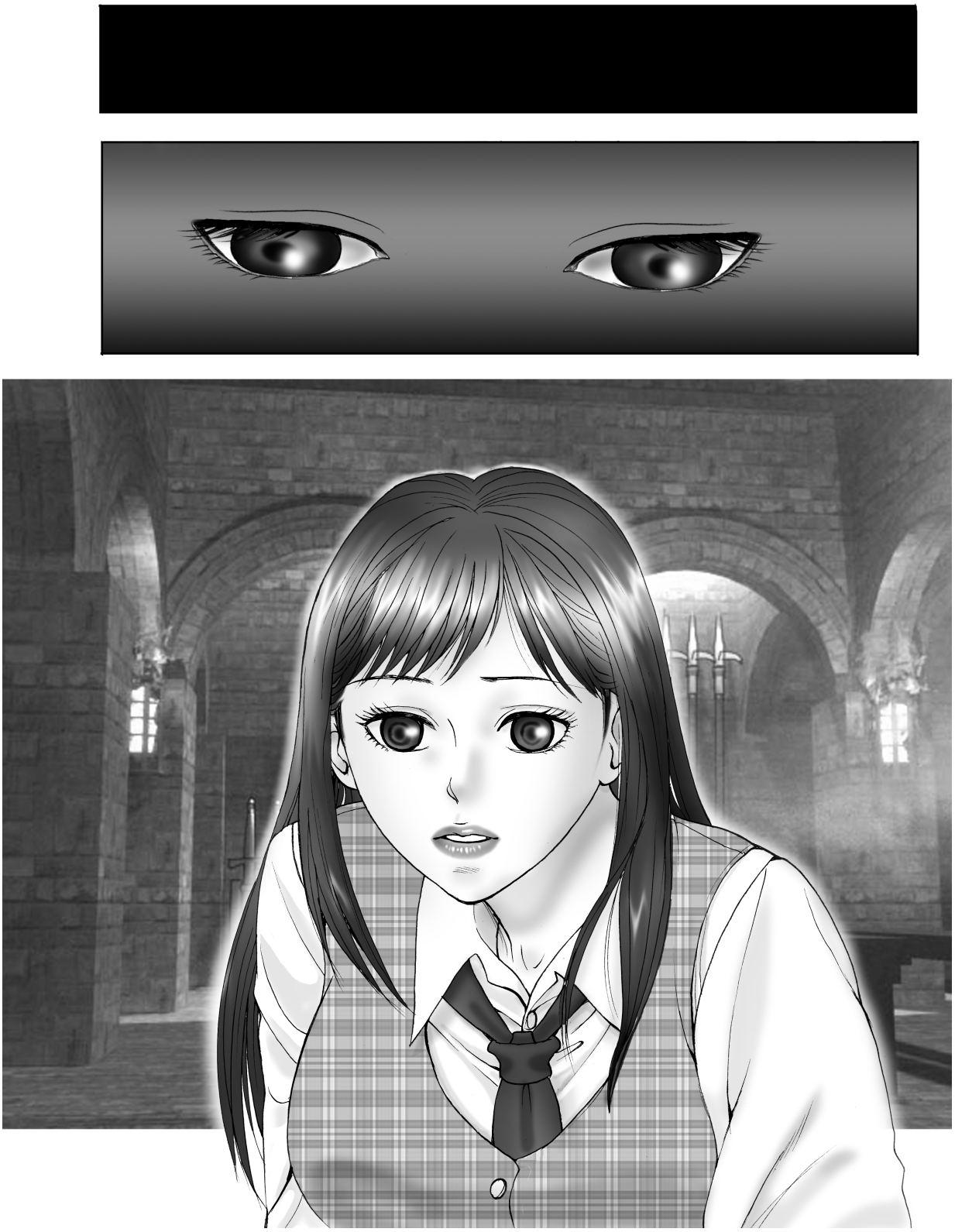
そこには一人の少女が横たわっていた。

死んでいるかのように、ピクリとも動かない。
私学の制服のようだ。ダークブラウンのローファー、濃紺の二ーソックス、グリーンを基調にしたタータンチェックの襞スカート、白いブラウスにワインカラーの棒ネクタイ。スカートと同じチェックのベスト。
すらりとした体形からは想像できないほどの、胸の隆起。
肩より少し長めのつややかな黒髪がみだれ、少女の横顔を覆って、形のいい耳が、髪の間からのぞいている。
閉じられていた少女の瞼がかすかに痙攣すると薄く目があいた。

少女の目にはぼんやりと小さな明りとりの窓がみえる

（どうしてわたし……こんなところに……ここは……どこ）
……意識が戻って来る……。ゆっくりと見渡すと周りは、がっちりと石材で囲まれたまるで牢獄のような造りだ。
石床の冷気が太ももから伝わってくる。
（なにここは……ここはどこ？わたし……思い出せない……落ち着いて……考えるのよどうしてこんなところに……ああっ頭が……うっ……痛い）
痛みとともに脳裏に浮かぶ風景があった
（家族がいた……家族の顔は……だめだ、思い出せない。でも……温かい家庭だった。何か事件に巻き込まれたの……わからない）

「お目覚めか」
不意に後ろから声をかけられ、恐怖で少女はとび起き、振り返る。



そこには痩せた頬骨の高い中年、いや初老ともいっていい男が立っていた。黒っぽいストライプのシャツに黒のズボン、目は落ち窪み、暗い目で少女を嘗め回すようにみつめている。
細身に見えるが、しっかりとした少女の骨格。スカートからのぞく健やかに伸びた足。けっして細すぎず、張りのある太ももだ。袖回りは大きめの上着なのに、バストは見事に隆起し、布地はツンと張って窮屈そうだ。
アーモンド型の目は少しつり気味だ。端正な顔立ちだが、気の強さを伺わせる大きめの唇が今は男の鋭い眼光に怯え、震えている。
「誰なんですか……あなた……あなたがわたしをここに？」
「クククッ忘れたか？」
と言われても、少女にはまったく覚えがない。
男はグワッと両手を広げる。まるで不吉なカラスのようだ。その翼が立ちすくむ少女を捕らえる。
「きゃああっ放して！放してよ‼」
（いやぁ、おぞましいっ！なんなのこの男、手を放しせっ。ああ あついきなり……上着の下から手を突っ込んで）
「あっ嫌っ！」
男の骨ばった手が少女のたっぷりと量感のある胸をブラジャーごと鷲づかみにする。血が逆流しカッと体が熱くなる。くすんだ顔色の男は、一瞬目を見開き、口角をゆがる。
「こんなかぁっ！こんなにお前のおっぱいは豊満だったのか」
喜色が男のくすんだ顔に浮かんだ。
「あああっ止めてよ、触らないで」
男の指がブラを押し上げてる。少女の素肌に直に男のかさついた指が触れたのだ。
おぞましさに少女は叫ぶ。が一向に躊躇することなく男は、胸を……その豊かなふくらみを揉みしだく……ゆっくり……質量を確かめるように下から持ち上げ、また揉みあげる。
ぐっとふくらみの根元を絞り上げると、胸はいっそう大きく隆起し上着が張り裂けそうだ。
その隆起を男はプルプルとゆする。
「ひっ！きゃっ！嫌っ‼やめっやめて！なっなんなのよ‼」
先ほどから必死でもがいてるが、もがいてもがいてもがっちりと腰を抱え込まれて逃げ出せない。
胸のふくらみを揺すられて乳首が上着の裏地とこすれてしまう。
「うくくっああっ」
思わず歯を食いしばる。男の冷たい指が先端の乳首をはさんでこりこりともみ始めたのだ。男のざらついた声が耳元で響く。
「ククッよしよし。弾むようなそれでいてしっとりと吸い付く乳房だ。おっ？乳首がツンと立ってきたぞ」
（ちっちがうっ！嫌悪感で硬くしこっているだけよ。なんなのよ、この無神経な指は、ゴリゴリとわたしの体をまさぐってる。いい加減にしなさい。わっわたしを誰だと思ってるの）
「馬鹿にしないで！早くここから出しなさい。このクズ‼」

思い切り、少女の腰に回した男の手の甲に爪をつきたてる。低く悲鳴をあげ男の手が緩む。その手からするりと抜け出し石壁の重厚なドアに向かって走り出す。
「あっ」
男に足をかけられ、少女は勢い余って石床にスライディングしてしまった。痛みに顔がゆがむ。
「くははは本性がでたか。そうだ、それがお前だ。生まれのよさと美貌を鼻にかけて傲岸不遜、高慢に振舞って学園では女王様気取りらしいな」
自分の行動に少女は驚いた。

（わたしを誰だと思ってるのって……わたしは一体誰なの……？）

「教えて、何でこんな目にあわなきゃいけないのよ。あなたは誰、わたしは誰なの⁉」
「わたしは誰かだと？くくくっくはははっ、思いださせてやるよっ」

少女は後ずさりする。
大声でひとしきり嘲り笑ていた男の表情が一変したのだ。瞳に残虐な光が宿り、今にも舌なめずりしそうだ。気圧れ少女は動くことができない。
男は年期が入って黒光りする木製の器具を両手で持ち上げる。
長さが九十センチ幅三十センチほどの板のように見えるが四つの穴が穿たれている。拘束具だ。
引きつった笑いを頬に浮かべて、いきなり男の足が一閃し、少女の腹部に食い込む。
「ウグェエ　ゲホッ」
苦痛に顔が歪む。激痛にもまして、この不気味な男が強烈な憎悪を持っているとはっきりしたことに、少女は震えた。
「いい肉の食い込みだ。楽しませてくれよ」
海老のように丸く石床にうずくまる少女の足首を手首を拘束具に押し込む。

（嫌だ……この男……普通じゃない……お腹を足蹴にするなんて……わたし……殺される？まさかっ）

「止めてよ、な何をする気なの⁉　怖いことしないで、お願いっ」
体をよじって拘束から逃れようとするが、男に見据えられ、蹴りの痛みがズンと腹部によみがえり、なすがままになってしまう。

「……すばらしい。一層美しいぞ。いい姿だ」
両手、両足首を拘束され前屈姿勢のまま立たされた少女の太ももを男はねっとり撫で回す。
ぷるるると内ももが震える。
（こんな……苦しい……動けない）

動くとバランスを崩して頭を石床に打ち付けてしまいそうだ。さっき転んだ時の痛みが、よみがえる。
男がゆっくりとスカートの裾をめくりあげる。縁に小さくレースをあしらった下着があらわになってしまった。
「着やせするのか？見かけよりもむっちりと白く、肉好きのいいお尻だ」
（あああっ見つめてる。お尻を……。いやぁあ……えっパンツを……食い込ませて……はぁあ止めてそれ以上は……あっああ）
男の目の前に下着で隠されているとはいえ、性器の丸みがぷっくりと顕わになる。芳しく匂いたたんばかりの膨らみだ。実際、あたたかな肌の匂いが太ももからたちこめ、男はその残忍な目を細めた。
「あっ！うううっ　ひやぁ」
声が裏返る。男は指をその白いふくらみの真ん中にぐんと突き立てたてたのだ。
少女はお尻を男の指から逃れようと精一杯振ってみるが、何の効果もなく、男の嘲笑をかきたてただけだった。
「こりゃ、まったく……驚いたな。布越しでもよく育ってるのがわかるぞ。どうだ、この丘のふくよかな張りは」
男はつんつんと少女の柔らかな大陰唇を指先でつつきまわしその反発を楽しんでいるようだ。と丘の真ん中に沿って指を上下にこすり出す。
シュラシュラシュラと衣擦れの音が石壁に響いてる。
（もうもう立ってられないよ。膝が震える……ううぁあ……）
性器の膨らみの下端を男の指が嬲りだす。
コリュコリュクニクニと肉芽が蠢く。
指の先が的確に肉の突起の先端をついばむ。
「尻たぼまで赤くして……そんなに恥かしいのか？ええっ」
恥ずかしいに決まっている。おぞましい感触に気持ちがささくれ立っているのに、衣擦れの音は粘り気を帯びてきているのだ。
恐怖といじられているクリトリスから広がる甘酸っぱい感覚が少女の理性を蝕んでいく。
「恥ずかしい？はんっ！こんなことで恥ずかしがってどうする？お前にはなぁ、全部だ、裸という意味じゃない、体の奥深く、はらわたまで見せてもらうぞ！」
（嫌だぁーっ‼これ以上）
少女は不自由な姿勢から精一杯絶叫した。
「あああーっ　変態ーっ　頭おかしいでしょ、あんた。触るなっ‼」
男の愛撫とも嬲りともつかない指の動きが止まると男はいきなりお尻をトンとついた。危ういバランスでやっと立っていた少女は前につんのめる。
「きゃあああっ」
拘束された手足を起点に振り子のように、そのまま顔が石

畳に激突する―その寸前、ブラウスの襟を男は掴んだ。
グンッ！
少女の目の前に石畳が迫り止った。
「くふふっ、くはははっまだきれいな顔でいてくれないとなぁ」

少女は手足を大きさの割りにずっしり重い木製の拘束具に固定されたまま、仰向けに転がされた。
がたがたと振るえ、はぁ～と少女の口からため息が漏れる。
今まで息をするのを忘れてたようだった。二つ折りにされた不自然な体勢だけど石床に、体重を預けることができて、呼吸は楽になった。
と同時に少女に最初の疑問が頭をもたげてくる。
「あなたは……どうして……こんなひどいこと」
「ひどい？ひどいってそういったのか、ええっ……⁉そうか、女王様はもうお忘れか？」
男がぐっと顔を突き出す。
（頬のこけた……いくつだろうか……皺が深い。ああっ思い出そうとすると……頭が痛む……。なにか、薬でも使って、記憶を曖昧にされているのかも）

男が骨ばった手を伸ばして頬に触った。
ビクッと震える少女。

（えっ嘘⁉）
男の顔が近づく。血の気がひいたのが自分でもわかる。
「いやぁふぐぅうむむむっ」
男が少女の唇に吸いついたのだ。チュウチュウ音をたてて、貪るように吸い上げなめ回す。
少女の鼻孔に男の唾液と加齢臭の混ざった匂いが広がる。
（わぁああっ許して、それは……）

舌が、男の舌が進入してくる。必死で歯を食いしばる。少女の頬を掴んだ指に男は力を込めた。何が何でも舌を少女の口中奥まで侵入させたいのだ。
噛み合わせが緩みちろちろと男の舌が少女の舌を侵食し始める。
（そんな、いやです。ああっ、こんな男に……うぐぐっ。舌の裏まで……じゅるじゅる啜られている……気持ち……悪ぅううっ……）
歯茎をニチャニチャ、歯茎の奥のほう、裏のほうを嘗め回す激しく体をよじるが少女は叫ぶことすらできない。

いったい何分続いたのだろうか、やっと唇を離された時には嫌悪で全身に悪寒が走った。

おぞましい男と交じり合った唾液が少女の口をべとべとに汚している。

一瞬少女が力を抜いた時、グン！男はいきなり両手両足を固定している拘束具を、少女の頭の方へ引き上げたのだ。
その拘束具を縄で固定しているようだ。
膝の裏の筋がビリビリ痛い。

（あああっ苦しい……）

お尻が、いやショーツで隠された性器のふくらみが天井を向いている。

（天井？何なの……鉄棒が渡してある……縄が……いやぁこれ以上何をしようというの……）

「はっあああっ嫌っ嫌っ、やめっ、やめっやめてーっ!!」
男の指がフリルをあしらった、下着の両脇にかかるとすると剥きにかかった。ショーツが剥かれ、覆い隠されていた、秘密の部分が外気に晒されるのが少女にもはっきりとわかる。
「うううっ見ないでよっ。いやあああっ！うぐぅうううっ」
男の漆黒の眼球に酷薄な炎が燃えている。少女は正視できず目を固く閉じるが、閉じても自分の性器がこの男の目の前に晒されることに変わりはないのだ。
「ほぉ最初に肛門が見えるぞ」
「えっくくっ」
悲鳴が嗚咽めいたものに変わってきている。
「ふふふっ　綺麗に放射線上に襞が織り込まれてる。色もあまりいや、ほとんど周りの肌色といっしょだ。これでは、健康すぎて隠微な感じはしないな」

（みっ見られてるの。お尻の穴を……ひいいっ、そんな……見ないでよぉおおっ。何なのよ、変態……どうしてどうしてこんなっ……ひーっ！さっ触った！お尻の穴）

むずむずとした感触が全身を襲う。
「いっいや触らないで！ほんとに触らないで下さい。そんなとこっ」
「ここから、お前でもぶっというんこをひりだすんだろうなぁ、ええっ？」
ひっひいっと、ただもう少女は嗚咽を繰り返す。
「ほぉ艶やかな黒髪だとはわかっていたが、陰毛まで艶々じゃないか」
「えっ!? ああっ」
すでに下着は太ももまで剥かれていたのだ。
少女のぷっくらとふくれた恥丘が牢獄のような石造りの部屋を茫と照らす明かりに白くくっきりと浮かびあがっている。
「程よく脂がのって、どうだこの肌触り、やわらかくて指が吸

い込まれるぞ」
　男の手のひらが、じっとり汗ばんできた股間の丘を撫で回し、時折指の間で陰毛をはさんでひっぱる。
「ふっ、クリトリスは小さめなのかな。よく見えない」
　ざらざらとした男の声がじっとり湿り気を帯びてきている。表情は変わらないものの、目は淫蕩の炎が揺らめき、高ぶる情欲を無理に抑えているようにみえる。
「あああっ、あはっやめて……やめて……やめて」
少女の膝ががくがくと震え、膝裏の二本の腱がくっきりと浮かんだ。

（男の指の動きを……わかりたくない……感覚を遮断したい。ナメクジが肌をぬめぬめ這うような嫌悪感……指で一番敏感なところを覆っている三角形の肉皮あたりを……じらすように……いじってる……）

　少女のカッと体が火照った。
　感じたわけじゃない。きっと、きっとこの男は肉皮を剥いで小さく敏感な球体を搾り出すのだ。
　間違いない数秒後の少女の未来……そう予感したとき恥辱で体が燃え上がったのだ。

「しっとりと肌がうるおってきたな。この亀裂……ぐぱぁーっと一気に割ってやろうか、ええ？いやいや、じわじわとなぁ、くくくっ」

　男の右手の指、左手の指……が少女のびっちり口を閉じた秘所にあてがわれてる。

　ゆっくり合わさった丘が引き裂かれる感覚……。

「うううっひっくっ」
　涙があふれて横に流れて耳朶にたまってまた流れていく。
「ほぉおお、小さな唇が全部丸見えだぞ」
　いや考えたくない。そんな願いを逆なでするように男は少女の小陰唇の形状を事細かに説明するのだ。
「薄い紅色だ。クリトリスはよく見えないな。ほぼシンメトリーの左右の唇。少し湿ってるな。うん？いじられて感じてるのだろ？ほらほら、その唇の中はどうなってるのかな」
　閉じられている小陰唇の合わせ目に指二本を縦に割りいれて、ゆっくりと開く。
　花弁が左右に拡げられる……少女の性器のすべてが……男の吐く息にさらられている。
「……そっそんなぁ……見ないで見ないでっ」
「なんだっ鮮やかな紅色、いや肉の色だ。内分泌液で粘膜がぬめっておるわ」
　押し隠していた感情が吹き出たように、冷静な男の口調が変わった。
「……俺のものだ……思い知らせてやる……」
「うわわぁあーっ　嫌っ嫌っ嫌ーっ‼」
　男が吸い付いてきたのだ。
　少女の秘所に！

大切なところに！
未だ少女以外の誰も、触れるどころか、見たこともないまっさらな生殖器に！
「気持ち悪い、気持ち悪いんだよ、お前ーっ触るな、変態ーっ‼」
少女の悲鳴が部屋中に反響する。ピクリと男の動きが止まった。と少女の太ももを押さえ込んでいる手が振るえ、眉間に深い皺が刻まれた。
「マンコいじられて、嫌でも少し感じりゃ可愛いものを！鳥肌か！　全身に鳥肌か‼　ふつー頬を染めるもんだろ、ええっ⁉　何、青ざめてるんだ！」
一気に高ぶる男の感情に、少女はすくみあがった。

（この男、馬鹿だ。生理的にどれだけ自分が嫌われるタイプが自覚してないんだ。キモイ、最低、死ねばいいのに。嫌、嫌っこんなやつに……）

男が据わった目つきで立ち上がる。
ベルトをはずして、折り目のきっちりついた黒ズボンを脱ぐとトランクスの前が大きく隆起している。
「ふふっ……低周波バイブを一番敏感なところに貼り付けてやろうか？それとも催淫薬を直に打ってやろうか。そうすりゃ嫌でもお前のマンコは濡れまくるだろうよ」
無理に感情を押し殺した不気味な声に戻った。
男がゆっくりとトランクスを下げると、ビンと音を立てて赤黒いペニスが屹立する。年を考えるとありえないほどの角度で勃起しているのだ。
陰茎にはミミズがはったように血管が筋を立てて浮かび上がり、雁の広がった亀頭はつやつやと湯気をたて、先端からは透明の先走り液がたらたらと滴り落ちる。
その様がいやでも少女の目に入ると、鳥肌はますますひどく、嫌悪感で彼女の性器は縮みあがった。
己の隆起を満足そうに、手で撫で回しながら、男が少女の耳元で脅すように言い放つ。
「いやいや、下手に弄繰り回して濡らしてやっても面白くない。縮み上がって、硬く閉じてるままのお前のマンコを、ぶち抜いてやるよ」
「えっひいっ⁉」
男は腰を沈めた。
張りのない男のくすんだ両の太ももに、少女の白いお尻が挟み込まれる。男は両手をお尻に回して持ち上げた。
艶やかな秘毛に縁取られた亀裂に男のカウパー腺液がツッーと垂れて糸を引いている。
（えっ、犯されるの。こんなやつに、何故！どうして？そんなあああああっ）
「うぐぐぐっ」
かみ締めた唇からうめき声がもれる。
「くぅー、ぷりぷりにはちきれんばかりに勃起してジンジン痛いほどだ。新種のＥＤ治療薬だがよく効く」
口角をゆがめ引きつった笑いを男は浮かべ、はちきれんばかりに充血した己のペニスを握り締めて、クニクニと整った花弁がのぞく紅色の割れ目にこすり付ける。